

北海道合鴨水稻会

# 水かき通信

## 第2回フォーラム報告

木村 篤・坂本 雄紀

第二回フォーラムが、去る2月7日に滝川市総合福祉センターで行われました。総勢約60名が集まり、「皆の支えなくして農業は成立しない。そういう想いを確認するために、生産者、消費者で大切な命を守る農業はどうあるべきかを考えよう」と世話人代表浅野晃彦氏による開会の言葉によって、フォーラムは幕を開けました。基調講演に長谷川クリニック院長長谷川浩氏、パネルディスカッションでのコーディネーターに北海道有機農業研究協議会会長西部慎三氏、パネリストに合鴨農法実践者

折坂義一氏、美唄市学校給食センター米養士竹内明子氏、長寿の里社長結城重助氏、北海道大学農学部3年生坂本雄紀君を迎え、それぞれの立場からフォーラムテーマ「育もうあたたかい食と農」に即して意見が交わされました。

長谷川氏による基調講演では、「米アレルギーから学ぶもの」と題し、食生活とアレルギーについての関係をわかりやすく語っていただきました。日本人の主食である米に対してアレルギーを持つ方は、昭和60年から増えてきたそうで、米の品種によ

ってアレルギー反応の違いが出てくるそうです。日本人の食生活は、飽食の時代に入り、油の多い西洋的味付けをした料理が食卓に並び、米も一人当たりの消費量が減り、食味を追求した品種の改良が要求されるようになりました。

確定できるデータは無いものの、品種「ゆきひかり」が、アレルギーに対して効力があるとのことですが、こういった品種の違いにより異なるアレルギー反応が出る背景には、こういった日本人の食生活の変化及び多様化があるとの指摘もされました。



基調講演後のパネルディスカッションでは、4人のパネリストがそれぞれの立場から意見が出されました。

初めに、長谷川氏による基調講演について各パネラーの自己紹介を兼ねて意見を述べて頂きました。結城氏は長寿の里で作られた酒まんじゅうを会場の参加者に差し入れて下さ

り、最近の子供たちにアレルギーが多いのは、彼らが日常の生活の中で動かなくなったこと、そして食べたことによって得たエネルギーが外に発散されないがためにアレルギー反応が出てしまうのではないかと基調講演に対する感想を述べられました。



美唄市学校給食センターに勤務している竹内氏は、給食センターと学校との間にある食に関する認識のギャップ、距離に学校給食の問題があるのではないかと指摘されました。センター方式では、一定地域の給食を学校外の一ヶ所で作るため、子供たちが直接給食を作る現場を見ることがなく、またセンターで働く調理師さんと接する機会も子供たちに与えることができない。センター側ではセンターと子供たちとの距離を教育によって埋めようとするが、例えばブロッコリーに虫がついていたと学校からクレームがつくという(虫のつかない野菜の方が恐いのではないのでしょうか。)学校での食に関する

教育はセンター側が望むものとは異なっていると指摘され、センターにいてわかる現在の学校給食の危機感を会場に伝えて頂きました。

さらに、今の子供たちはコンビニでお金を出せば、何でもすぐ食べられるので匂の味覚を知らないことを述べ、センターのメリットも大きいですが、子供たちに接する機会が少ないため、匂の味を伝えにくいデメリットもあることを語られました。



合鴨水稲同時作を実践する生産者の折坂氏は、アレルギーの原因が多々挙げられるという長谷川氏の講演に対して、「原因の一つと考えられるインスタント食品が爆発的に売れたことは日本人の食の利便性、簡便性の追求にあったのではないか。手軽にしかも日持ちする食品がまかり通るのは問題だ。キャンプに行っても面倒だからとインスタントで済ますが、こういった食品は食べた分だけゴミ

が出るため環境に良くない。しかも体に悪いという悪循環を繰り返している。食ともっと真剣に付き合うことが大切だ。」と作る手間ひまを農作業を通して知っているからこそできる発言をいただきました。

坂本氏は、「アレルギーの要因の可能性のあるストレスは、現在ほとんど感じることはないが、生活の中で一番楽しい食生活に対して邪魔されることがストレスになる」と会場に笑いを起こす自己紹介に対し、長谷川氏は食べ過ぎは良くないから、ゆっくり噛むことをアドバイスされました。そして、ゆっくり食べて吸収したエネルギーは、やはり適度な運動をして消費することを勧められました。



長谷川氏は米の残留農薬に関する問題にも触れられ、どの農薬を減らして減農薬としているのか、また無農薬でもどの除草剤を使っているのか解らないことがあることを参加者に訴えられました。そして、竹内氏

の意見に対応して、米や野菜を生産する農作業の場や、食材を調理する給食センターの場の状況を子供に伝えるには、「食農教育」の一環に子供たちが田んぼに入る時間を制度として授業に組み込んでも良いのではないかと提言されました。また、子供だけではなく、「食農教育」がおろそかであった現在の大人から再教育していくことも必要であろうと示唆されました。



会場からの意見は、主に学校給食に関するものでした。北広島市の高嶋氏から給食に地元の米を使ってほしいと頼んでも入札で安い米が選ばれ、また米の入札制度や給食までの流通は不透明である現状が報告されました。当別町の大塚氏からは給食に使う野菜の規格が厳しく、一定の形や大きさを大量に要求されると困るという学校給食への食材を提供する側からの意見が出されました。また、大塚氏は地元の米や食材を使って調理される学校給食には賛成であ

るが、学校給食の補助が減っていく中で、地元から食材を仕入れることは給食費の一層の値上げにつながるのではないかと制度的問題点にも触れられました。

これに対し竹内氏は、夕張では各学校が独自に調理していたが、食材の卸先を無農薬の農協に変えることによって地元の商店が打撃を受けてしまうのが現状であって、給食センターだけではなく学校や親の理解と協力、また生産者の働きかけがなければ給食の改革は達成できないと回答されました。また、農産物の規格については、8時から10時半ぐらいまでに調理を終えなくてはならないということで機械が導入され、それと共に大きさを揃えることが要求されるため、限界があることも指摘されました。



長谷川氏から、合鴨米はこれが本来の価格かもしれないが、少し高いので安いものにならないかという率直な意見を述べられると共に、人々

が地球規模では持続可能な農法が大切だと理解すれば、合鴨米に高い付加価値を認めるのだろうと展望も語られました。

折坂氏は、「作物を栽培して売って金もうけの農業は最初からしたくなかったが、方策がみつからなかった。そんな時に合鴨と出会って、それからは家族は合鴨中心の生活サイクルとなっており、合鴨をだだの除草機械だと考えていたら、一年で止めていたかもしれない。合鴨のおかげで田から離れつつある子供たちが戻ってきた。農薬を一切使わないという誇りが持て、自分にとっても家族に

とってもいいことだと思う。消費者が生産者の顔を知っていることも、とても大切だと思う。合鴨水稲同時作を通して、様々な人と知り合う機会ができた。とりあえず、自分の周囲の人たちと支え合うということ、みんなが取り組めば日本の農業は良くなる。」と明るい展望も語られました。西部氏のコーディネートによってまとまりのあるパネルディスカッションが展開され、実りある第2回フォーラムとなりました。

(北海道大学農学部学生)

## 「高嶋家の合鴨たち」

高嶋 浩一

私は、平成元年より特別栽培米制度にのっとり、こだわりのお米を作って消費者に直売をしておりました。日頃から、「有機、減、低農薬」栽培などに接しており、たまたま当会の会員の当別T氏よりアイガモ農法をやるけれども、高嶋さんもやってみないかと声をかけられたのが、きっかけでした。何かに突き動かされたように、その夜にはアイガモ農法へのチャレンジを決断していました。3年前の春のことです。何もわからな

い中、一回の勉強会の知識だけを頼りに手探りで始まったのですが、家族の反対もかおしいカモのヒナを見てからは、なくなりました。子供達も友人らを連れて来ては、世話をしていますし、家族みんなで徐々に不安から楽しみに変わっていったようです。

50mほど離れた所にきつねの巣があり、外敵からの防御にはかなり神経を使いますが、平成8~10年の3シーズンのトータルで173/181の生存率は、まずまず評価できる数字と思

います。アイガモ君達の働きを見て  
いると、その自然の巧みさには感嘆  
させられます。苗とヒナの成長と雑  
草や虫の発生のバランスは見事で、  
ひとつの調和世界を創っています。  
見ていてとても気持ちが和み、農作  
業の疲れを癒してくれますし、訪れ  
た方々も同じような感慨を持たれる  
ようです。

7月下旬には水田より陸に上げ、文  
字どおり「地どり」として肥育しま  
すが、11月下旬には肉にして希望者  
に販売しています。そうしたことを  
見学者達に言うと異口同音に残酷だ  
とか、かわいそうとかの返事が来ま  
す。しかし、私は安直な動物愛護と  
かは論外で、カモはペットではなく、  
牛や豚と同じ家畜として飼っている  
こと、人はすべて動植物などの生命  
をいただいて生かされているのであ

って、カモ君達の「生」を全うして  
あげることが、逆に食べものへの感  
謝、命の大切さをより深く再認識で  
きるのではないだろうかと思し上げ  
るのですが、皆納得していくれるよ  
うです。生きた教材として現代人が  
忘れ去ってしまった、とても大きな  
ものを思い起こさせてくれるのです。

今年で4年目になり、毎年新しい  
発見と課題がある中でタカシマファ  
ームの「心」の発見、発信の場とし  
てアイガモ農法に取り組んでいきたく  
と思っています。また、当会の全国  
大会実行委員会のひとりとなり、そ  
れに向けての準備などたいへんな作  
業もあるようです。会員の皆様とも  
ども頑張っていきたいと思ひますの  
で、宜しくお願いいたします。

(タカシマファーム経営者)

## 「第9回全国合鴨フォーラム京都大会報告」

大窪 宗磨

今回で第9回目を迎える全国合鴨  
フォーラムが、京都府京北町にて去  
る2月26、27日に行われました。全  
国から約380名が参加し、北海道合  
鴨水稲会からは当会派遣費用によっ  
て7名及び自費での参加者4名の計11

人が参加しました。大会テーマに「合  
鴨農法のおもしろさと可能性を求め  
て」を掲げ、一日目は合鴨水稲同時  
作を取り巻く生活を中心に、二日目  
は技術面における研究成果を内容の  
軸として開催されました。

京都大学名誉教授飯沼二郎氏によ  
る基調講演「合鴨水稲同時作の将来  
方向」では、湿潤地日本と乾燥地米  
国の農法の違いが述べられ、それぞ  
れの風土に見合った農法こそが発展  
する道であり、1961年に始まる基本  
法農政によって否定された伝統的な  
田畑輪換農法の優位性を語られました。  
また、田畑輪換では一般的には、  
水稲による収入が主体となり、畑作  
は副収入となるため、現在の麦や豆  
の国内価格を上げるための政府及び  
諸外国との政治的交渉が必要となる  
ことも示唆されました。



熊本大学文学部助教授徳野貞雄氏  
による苗に衣着せぬ迫力ある個別報  
告『じじ・ばばエデュケーション』  
による持続的農村維持戦略」は、会  
場を大いに湧かせました。まず、合  
鴨水稲同時作を行なっている農家の  
特徴として1) 農業が好き 2) 年輩者が  
多い 3) 夫婦仲良しであると挙げられ  
ました。氏は、20世紀前半を食糧・  
モノの生産増加を契機とした人口爆

発時代、20世紀後半を物的生産爆発  
時代として20世紀に貫かれたものが  
生産力主義であり、現在生産力第一  
とする発想・思考が限界を迎えているこ



とを述べ、発想の転換を参加者に促  
しました。一つに、過疎の定義を人  
口減少ではなく、家族機能の不全化、  
年齢構成のアンバランスに転換する  
こと。もう一つは、生産力重視から  
生活重視への転換。日本は少子化傾  
向にあって人口減少は当たり前であ  
って、問題とすべきは活力ある地域  
を創ることであり、その実践におい  
て、じじ、ばばの在り方を提言され  
ました。



合鴨水稲同時作の先駆者である古野隆雄氏の個別報告「アゾラ・魚・合鴨・水稲同時」は、アジアの水田を強く意識し報告されました。

氏は水田が「米だけをつくる場」という一般的な観念に対して、合鴨によってヒエを食べてもらい、さらに彼等には水田の表面に浮かぶアゾラ（空気中の窒素を固定し合鴨くんのエサとなる水性シダ植物）を食べさせ、合鴨の糞で育ったミジンコやアカムシ、イトミミズやプランクトンをドジョウが食べるといった各生物による相互依存の循環システムといった水田の可能性について語られました。北海道ではアゾラの生育は気候上困難とのことですが、水田に秘められた機能を引き出すアイデアを北海道合鴨水稲会での圃場見学会

などを通して見い出すことができるのではないのでしょうか。

2001年の全国フォーラムが北海道で開催することがアナウンスされると、会場から期待のどよめきが起こりました。また、懇親会においても「ぜひ行かせていただきます」と多くの人に声をかけられました。実行委員による京都大会の運営は周到でしたが、参加者同士が交流を深める場が用意されていないと感じました。人と人との交流を大切にする場を考慮することも、全国大会を突りあるものにするために必要であるかと思えます。

（北海道大学農学部大学院生）

## 第5回総会報告

事務局

第5回北海道合鴨水稲会総会が、2月7日の第二回フォーラムを終えた後に行われました。総会議長に当別町の大塚氏が選任され、速やかに進行されました。98年度事業報告が、世話人の一人である折坂氏から報告されました。98年度の事業内容は、

以下のように報告されました。

- 1) 総会及びフォーラムの開催  
(2月1日旭川市サン・アザレア)
- 2) 圃場見学会実施  
(7月6、7日剣淵町・当麻町)
- 3) 全国合鴨フォーラム岡山大会派遣
- 4) 定期通信発行

(第6号4月18日、第7号1999年1月1日発行)

5) 世話人会の開催(第1回3月31日、第2回11月10日、第3回12月8日)

次に、事務局が1998年度決算として総収入246,705円、総支出113,866円により132,839円が次年度繰越金として1999年度予算に盛り込まれること及び築城正行氏による監査によって確認されたことを報告しました。

また1999年度予算案として予算額492,839円が見積もられ、その内「2001年度全国大会準備費用」として20万円が割り当てられたことを説明しました。これら1998年度決算報告及び1999年度予算案は、満場一致で承認されました。

1999年事業計画案は、以下のよう

に報告されました。

- 1) 総会及びフォーラムの開催  
(2月7日実施)
- 2) 圃場見学会の実施  
(道央ブロックが企画1999年7月～8月実施予定)
- 3) 全国合鴨フォーラム京都大会派遣  
(2月26、27日)
- 4) 定期通信発行
- 5) 全国合鴨フォーラムの北海道開催についての検討
- 6) 技術開発試験の実施と協力
- 7) 広報活動の強化
- 8) 世話人会の開催

9) その他

報告9) その他において、合鴨米の流通量と合鴨水稲同時作実施面積とのズレがあるという噂があり、それに関する当会の見解が会員から問われました。それを受け、合鴨米として販売している農家は会員以外にいる可能性はあるだろうが、合鴨米と称して不誠実な生産、流通を行い当会の理念を著しく傷つけるような会員に対しては、除名もしくは退会してもらおうということで当会の意見が一致しました。

また、第2回フォーラムのパネルディスカッションの内容を受け、世話人会より農家に実習生として学生を迎え入れてはどうかと提案されました。この案は、会員の承認が得られ、学生側を取りまとめるには当会顧問である北海道大学農学部教授三島徳三氏が全面的に支援して頂くことになりました。

報告5) 全国合鴨フォーラム北海道大会においては、大会準備を進める上で世話人会とは別に実行委員会を設けることが承認され、実行委員が各ブロックより選出されました。

世話人会のメンバーも改選され、世話人代表は引き続き浅野晃彦氏が選ばれ、各ブロックからは太田順夫氏、折坂義一氏、谷口隆志氏、築城正行氏、川本隆幸氏が選出されまし

た。実行委員会は、上記の世話人および今橋道夫氏、鈴木陽一氏、高嶋

浩一氏によって構成されることになりました。

## 事務局より

### □薩摩鴨の試験的利用について

平素より、北海道立滝川畜産試験場をご支援いただき心からお礼申し上げます。

さて、試験場で余裕の出た時に、一昨  
年水稲会のご支援で導入できた「薩摩鴨」  
の試験的利用を希望される下記まで、ご一  
報ください。なお、大量の希望はご遠慮く  
ださいようお願いいたします。

北海道立滝川畜産試験場研究部家きん科  
〒073-0026

北海道滝川市東滝川 735 番地 1

TEL : 0125-28-2211

FAX : 0125-28-2165

E-mail アドレス

[oharamt@agri.pref.hokkaido.jp]

大原 睦生

### 編集後記

最近、ふとなぜ自分は合鴨と関係しているの  
だろうかと思う。でも合鴨を通していろ  
んな人と知り合うことができた。この機  
会は貴重なものだ。合鴨との出会いは自分  
にとっても大きいことだったと思う。(木  
村)

後輩との編集。教えることが多いだろ  
うと思ってたら、後輩の方がすんなり出き  
ちゃう。先輩面すりゃ、失敗してしまう。  
励まされながらの編集となりました。感謝  
感謝 (大窪)

### □北海道合鴨水稲会入会案内

当会の主な活動は、総会及びフォーラム、  
圃場見学会、『水かき通信』の発行、全国  
合鴨フォーラムへの会員派遣等です。入会  
されますと、行事の案内状、『水かき通信』  
が届きます。入会は、事務局へ住所、氏名、  
所属等を連絡の上、年会費 6,000 円を納入  
すればできます。

### □会費納入のお願い

郵便振替払込書を同封されている方は、  
99年度会費 6,000 円を郵便振替口座に振  
り込んで下さい。同封した郵便振替払込書  
を使われますと、手数料はかかりません。

口座番号：02700-3-38241

加入者名：北海道合鴨水稲会

払込払出局：札幌北七条郵便局

北海道合鴨水稲会 水かき通信 第8号

1999年5月13日発行

発行：北海道合鴨水稲会

〒060 札幌市北区北9条西9丁目

北海道大学農学部

農業経済学科農業市場学講座

大窪 宗磨・木村 篤・坂本 雄紀

TEL:011-706-4941

FAX:011-736-8633